

信玄堤

しんげんづつみ
SHINGEN-ZUTSUMI
GUIDE BOOK

信玄堤

SHINGEN-ZUTSUMI
GUIDE BOOK

山梨県甲斐市
〒400-0192

山梨県甲斐市篠原2610

発行/甲斐市商工観光課

2024年(令和6年)1月改訂

TEL(055)276-2111(代表)

FAX(055)276-7214

URL <https://www.city.kai.yamanashi.jp>



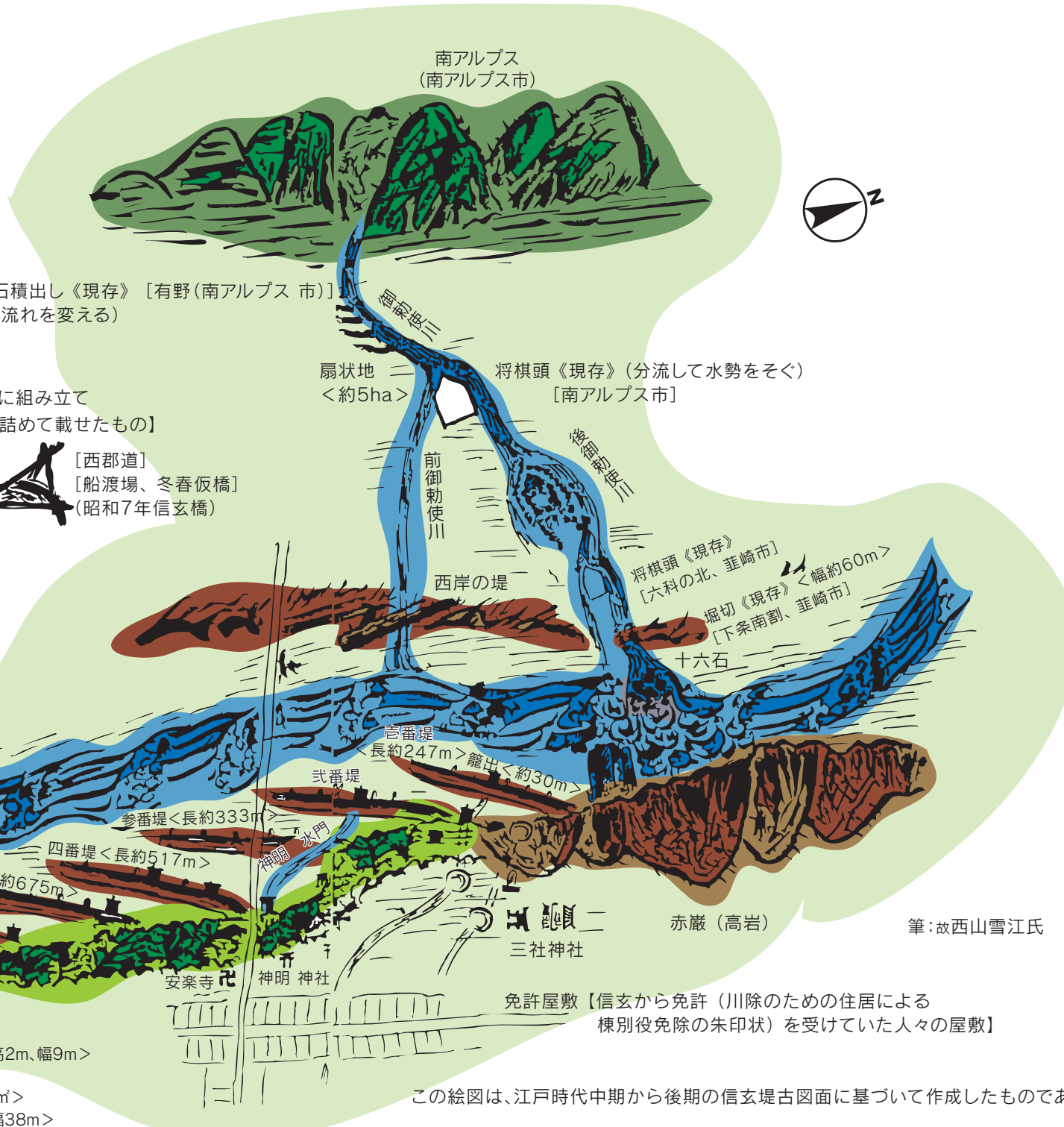
協力/国土交通省甲府河川国道事務所
制作/株式会社サンニチ印刷



この印刷物は環境にやさしい植物油型
インキを使用して印刷しました。

信玄堤略絵図

暴れる自然に立ち向かった先人たちの情熱。



石積出し《現存》[有野(南アルプス市)]
(流れを変える)

南アルプス
(南アルプス市)



聖牛【木材を三角に組み立て
蛇籠に石を詰めて載せたもの】



[西郡道]
[船渡場、冬春仮橋]
(昭和7年信玄橋)

扇状地
<約5ha>

将棋頭《現存》(分流して水勢をそぐ)
[南アルプス市]

将棋頭《現存》
[六科の北、韮崎市]
堀切《現存》<幅約60m>
[下条南割、韮崎市]

目次

治水…………… 2~3
 信玄堤の歴史…………… 4~7
 治水の構想…………… 8~10
 おみゆきさん……………11
 三社神社……………12

文献、資料などを参考に甲斐市文化財保護審議会委員・公益財団法人山梨文化財研究所の畑大介氏のご意見を頂いて編集致しました。

本堤(お林)
《現存》
<長1,909m、高2m、幅9m>
《1819年》
<面積75,838㎡>
<長1,972m、幅38m>

免許屋敷【信玄から免許(川除のための住居による棟別役免除の朱印状)を受けていた人々の屋敷】

筆:故西山雪江氏

この絵図は、江戸時代中期から後期の信玄堤古図面に基づいて作成したものである。

現在の釜無川と信玄堤

信玄堤は、武田信玄が氾濫をくり返す釜無川の水を治めるため約十七年の歳月と、斬新な治水工法により永禄三年（一五六〇年）には完成していたと言われています。

その工法は水流の自然法則を利用して急流御勅使川の水勢を弱めるような工夫がされています。南アルプスの深い谷から扇状地のかなめ、旧・白根町有野まで「石積み出し」を築いて

主流を北東へ向けさせ、旧・八田村六科の北方に「将棋頭」を設け、水勢を分断し、釜無川合流点に「十八石」という大石を伏せ込み、水勢を弱めて釜無川に合流させ、本流を自然の堤防である「高岩」に当て、甲府盆地への水流の直撃を避けました。

江戸中期の絵図をみると堤は河岸に沿って一線で、一番から五番まで各堤を川を中心に向けて斜めから突出

させ、対岸にも「出し」を設けて交互に水勢を循環させ、水勢を弱めるようにしました。この堤の形態が雁の飛ぶ様に似ていることから「雁行堤」と呼ばれています。

現在のものは、明治中期に大改修され、おおむね直線となっていますが、一部に往時の原形をとどめています。

治水

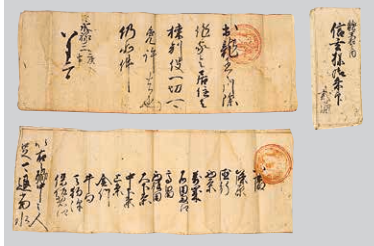
この文字に込められた熱い想いは、今も「信玄堤」として受け継がれています。





武田信玄御朱印

<保坂和彦氏蔵>



歴史

水を分け、流れを弱め、洪水を防ぐ。信玄堤四百数十年の歴史が語るもの。

どのようにして水を治めるのか

現在の山梨県甲府市を中心とした甲府盆地は、釜無川をはじめとする河川の運び出す土砂が堆積して出来上がった平地です。この中を笛吹川、釜無川は静岡県側に向かってY字型に流れ、合流して日本三大急流のひとつ富士川となって太平洋に注いでいますが、昔からたびたび大洪水を引き起こし、氾濫を繰り返してきました。天長二年（八二五年）には、御勅使川、釜無川が氾濫し穴被害をこうむったので時の朝廷は勅使を下向させて、三社（一の宮・浅間神社、二の宮・美和神社、三の宮・玉諸神社）へ命じて盛大な水防祭を行ったと言われています。

これが、毎年四月十五日に実施され、山梨県三大御幸の一つである「おみゆきさん」の始まりだと言われています。信玄堤は地域の大きな遺産であり、造られてから四百数十年の間、修復されながらも機能を充分に果たして、地域発展の基盤となっています。築堤は武田信玄が二十一歳で国主となつ

一、御勅使川が山からでたところの有野地先（旧・白根町）に石積出しを築き、流路を北東に変えて安定させます。
二、六科（旧・八田村）地先の西方に将棋頭と称する圭角の石堤を築き、それより北側に新しい川を開削し、激流を南北に二分します。

旧河道を前御勅使川と呼び、新河道を後御勅使川（又は、本御勅使川）と呼びました。

新河道の開削は人力で行うより他にありませんでしたが、特に「堀切」と呼ばれている地点の掘削は難工事でした。

三、その新しい川を更に分流し、割羽沢川と合流させます。支川の割羽沢の合流を調整するために、第二の将棋頭も造られています。現在は、この新しい川のみが御勅使川の河道になっており、古い川の御勅使川は昭和五年に廃河川となりました。

四、後御勅使川と釜無川の水勢を弱めるために両者を衝突させる方法を採用し、この合流点付近に「十六石」と称する十

六個の巨石を配置し、合流調整を行い、高岩の方に向かっていきます。

五、釜無川と後御勅使川が合流し、流量の増加した後に「高岩」へ当ててさらに水勢を弱めます。
こは塩川と釜無川が合流したばかりのところなので、激流どうしをさらに東岸の高岩という崖にぶつけるようにしたわけです。
このようにすると、高岩にあたった流水は反転し前御勅使川に向かいます。ここで前御勂使川を流れて下った水と衝突させ、水の勢いを再び弱めさせることとなります。

信玄の時代、御勅使川は現在の信玄橋の付近で釜無川と合流していました。合流の勢いにより、釜無川の河道を甲府盆地に向ける自然摂理的な作用が働き、特に御勂使川が急流であることと土砂運搬が多いこと、また甲府盆地西部が釜無川の造つた扇状地であることなどの理由から、地域住民は度重なる洪水に苦しめられていました。そのため信玄は、甲府盆地を洪水から守り、安定した土地利用、地域開発を図ることを目的として竜王の地に堤を築くことを決意しました。

六、釜無川を南に誘導するため、高岩から下流に向かって堤防を築きました。この堤防の完成に伴い信玄は永禄三年（一五六〇年）、堤防の裏側に人々が住むことを促しました。税金を免除するかわりに、堤防を守り新しい耕地を開発させようとしたと考えられています。

信玄堤は人々の憩いの場にもなっている。

皇太子殿下（現天皇陛下）
信玄堤視察
（2016年10月14日）



側の堤防が決壊してもその水は堤防が切れていなくなるからまた河道に戻すことが出来るのです。また、増水したときは自由に堤防の間から逆流してしばらく滞水し、減水に伴って自然に排水される仕組みになっているのです。



現在、盛大に行われている「おみゆきさん」も天長二年（八二五年）から始まり、年以上の歴史があると言われています。近年は、毎年四月十五日に行われており、一宮からきた神輿の担ぎ手は赤いタスキに紅おしろいで女装し、独特の踏み足で「ソコタイ、ソコタイ」と掛け声を掛けて練り歩きます。神輿が三社神社に着くと水防祈願をし、信玄堤に「注連」を張り、川除の儀式を行って、その年の無事を祈ります。川除の儀式で川に向かって投げられた石を拾うと、厄除けや無病息災にご利益があると伝えられています。

この信玄堤は、明治二十年から二十七年に近代工法により「改修堤」として高大な連続堤に造り替えられました。このときに「出し堤」は廃止され、その一部は現在の信玄堤に埋まっています。現在では、二番から三番の「出し堤」の名残を信玄堤の中にとこめるだけとなっています。

甲府盆地を守った信玄堤 どのような形で 守り続けてきたのか

信玄が当初築いた堤防の様子は、現在ではうかがい知る事は出来ません。江戸時代をとおして修復が繰り返され、堤防の形も変わっていった為です。江戸時代中期ごろには本堤から一番から五番までの「出し堤」を斜に川側に向けて築き、樹木を植えて補強し、その全面に堤防を保護するため「聖牛」が設置されました。出し堤は、不連続で重複して配置され、雁が列をなして飛び様に似ていることから「雁行堤」といわれました。現在の甲斐市勤労青少年ホームの付近には一番堤があつたと推定されます。本堤は、良質の粘土をよく突き固めてつくられています。また、築堤後、堤とその周辺に植えられてきたケヤキなどの巨木が現在でも緑豊かな林を作り出し、通称「お林」と呼ばれています。

高岩から続く本堤は江戸時代前期にかけて笛吹川との合流点まで南側に延長され、この延長部分も不連続の堤防で「霞堤」と呼ばれています。この方式なら、仮に上流よって決壊しなかつたということからも、いかに立派な堤防であるかということを知ることが出来ます。

築堤以後、各時代の人々に守られて強固にするための献身的な努力が払われてきていること、また治水施設としてだけではなく、堤に水門を設けて有効な取水が図られていることも忘れてはならないことです。

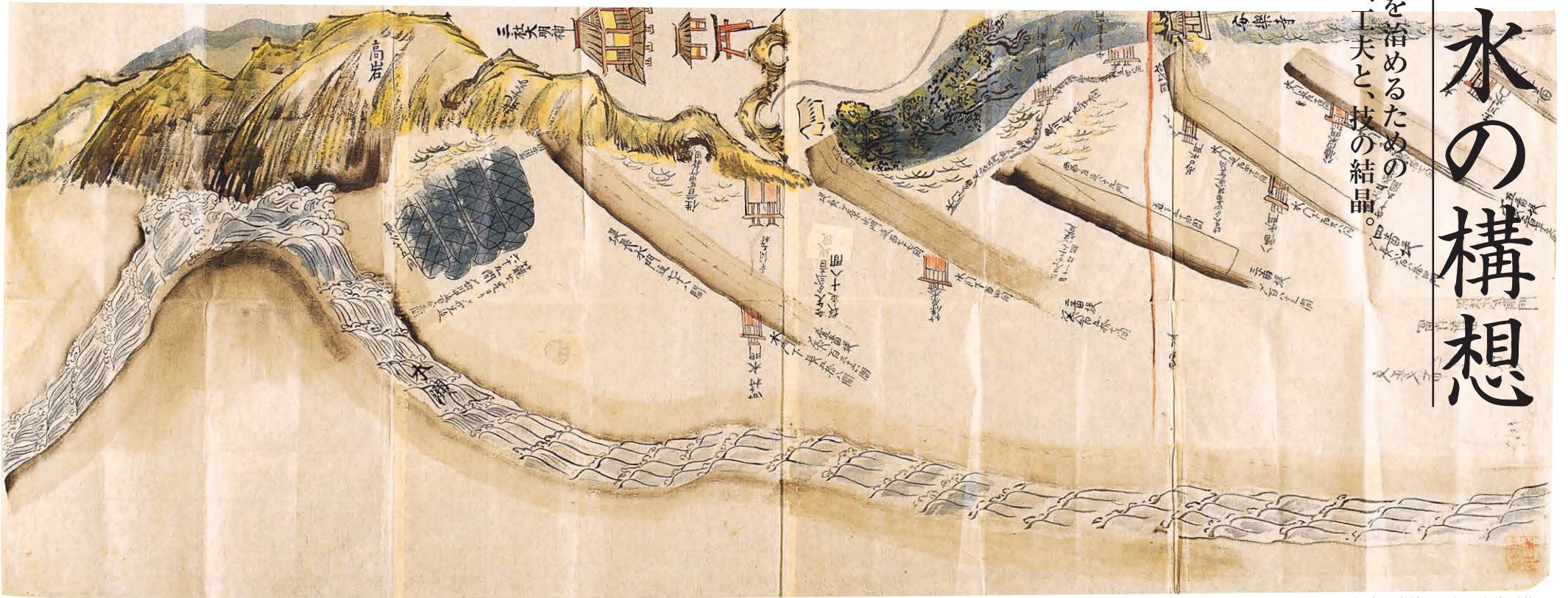
現在は、甲斐市勤労青少年ホーム上流の高岩頭首工、信玄橋下流の上堰頭首工から農業用水等を取水しています。

祖先から受け継いだ貴重な遺産ですから市民の誇りとして、大切に次代に引き継いでいきたいと思います。

信玄堤の甲斐市勤労青少年ホーム駐車場付近には、大きな信玄堤の案内版が設置されています。表側には信玄公築造当時の想定図やその歴史、釜無川、御勅使川を含めた自然の地形を利用した治水システムの説明が、裏側にはおみゆきさんの風景やその説明が記されています。

治水の構想

暴れ川を治めるための知恵と、工夫と、技の結晶。



信玄堤古絵図<保坂和彦氏蔵>

水を治める知恵を先人に学ぶ

甲府盆地を氾濫の水害から守るためには釜無川を安定させる必要があります。その為には、支川の御勅使川を安定させなければなりません。御勅使川は巨摩山地の脆弱な地域を流域としているために多量の土砂を流下させて、半径が約4kmの扇状地を形成しており、その上を河床勾配が1/60以上で流れる極めて急流な河川です。

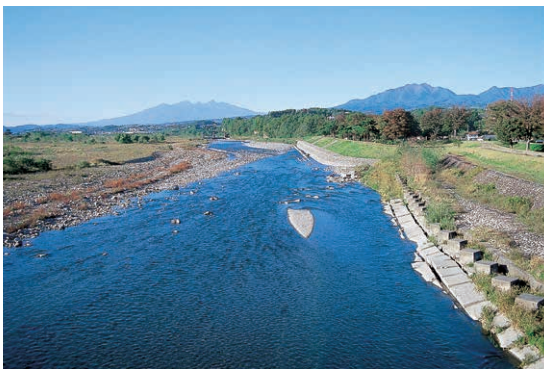
御勅使川は武田信玄時代には距離杭（10ページ図1）1地点の右岸付近で釜無川に合流していました。おおむね現在の神明川の川筋です。多量の土砂を堆積させ、しかも急流な御勅使川がこの地点で合流すると、釜無川を盆地の中央に押し出します。治水の上からは極めて危険な状態でした。信玄は天文十一年（一五四二年）の大水害の経験から甲府盆地の開発と安定した土地の利用のためには釜無川と御勅使川をセットで改修する事が必要だと考えました。しかし、この改修を進めるには次のような課題がありました。

- 一、釜無川を氾濫させないための堅固な堤防を造る。
- 二、大洪水でも堤防が決壊しないようにするために堤防に懸る水の勢いを減らす。
- 三、釜無川の左岸に御勅使川の激流が突き

当たらないような安定策をとる。

- 四、釜無川と御勅使川により流れ下りてくる多量の土砂への対処をする。

- 五、治水施設の機能を維持し治水の重要性を領民に周知させるための方策をとる。
- 以上のことを解決するのは大変な苦労と困難がありました。解決に向けて信玄は次のように河川改修事業を進めました。



現在は、コンクリート三基構とコンクリート練石張も施工されている。



おみゆきさん

祭りで育む、心のきずな。



神輿の下を子どもがくぐると思病息災に かけ声も勇ましいおみゆきさん

自然猛威の力を弱めるための、見事なまでの知恵と工夫。



A 御勅使川の制御のための「石積出し」

E 合流調整のための十六石



その掛け声はなに
神輿の掛け声「ソコダイ、ソコダイ」は一宮「浅間神社」から七里(約二十八km)という長い道のりのため終点がすく「ソコダイ」と威勢をつけた意味だと言われている。

あのおみゆきさん
おみゆきさんは、大神祭(おみゆきさん)のことです。今から約二百年前の天長二年、釜無川の水難を除くため淳和天皇の使いが来て、三つの神社に命じて水防祈願を行ったのが起源とされています。三つの神社とは、笛吹市一宮町の「浅間神社(木花開耶姫命)」、二宮の「美和神社(大物主命)」、三宮の「美和神社(大物主命)」の三つです。神輿等が、一宮、二宮、三宮を出発、三社神社まで水防祈願の思いを込めて練り歩きます。

春の訪れに「ソコダイ」のかけ声
おみゆきさんは、大神祭(おみゆきさん)のことです。今から約二百年前の天長二年、釜無川の水難を除くため淳和天皇の使いが来て、三つの神社に命じて水防祈願を行ったのが起源とされています。三つの神社とは、笛吹市一宮町の「浅間神社(木花開耶姫命)」、二宮の「美和神社(大物主命)」、三宮の「美和神社(大物主命)」の三つです。神輿等が、一宮、二宮、三宮を出発、三社神社まで水防祈願の思いを込めて練り歩きます。

昔は大名行列みたくでした
一宮の浅間神社に伝わる絵巻物によると当時の十萬石の大名行列と同じくらいの大規模だったそうです。



水防祈願の川除祭

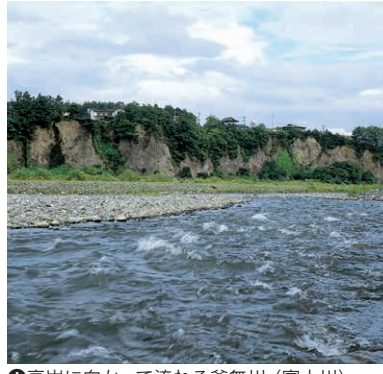
昔は車に載せられて神輿が信玄塚まで来ますが、昔は浅間神社から交代で担がれてきました。ですから神輿が一宮に帰るのが真夜中になったり次の朝だったこともあったと伝えられています。

現在でもこの伝統は引き継がれ毎年、出水期の前の四月十五日に水防祭り「おみゆきさん」が行われています。

図1を参照しながら説明をしましょう。
先ず御勅使川の河道を安定させるために、図のA地点(南アルプス市築山)に巨大な「石積出し」を造って扇頂部における流れの乱れをおさえ御勅使川の河道の安定をはかります。B地点(南アルプス市有野)とC地点(韮崎市竜岡)に「将棋頭」という分流構を設けるとともにD地点(堀



C 現在も残る韮崎市竜岡町の将棋頭



D 高岩に向かって流れる釜無川(富士川)

切橋付近)を開削して新たに新河道を造り、流れを二分させて水勢を弱めます。次にE地点(韮崎市御座田)に十六の巨石を置いて釜無川との合流を調整し、さらに釜無川の主流がF地点「高岩」に突き当たるよう流れの向きを調整させます。その下流の左岸には、竜王の鼻に山付けした、いわゆる信玄堤を築造しましたが、堤防が直接、洪水に襲われないように「出し」を直前に置き、二重の備えとしました。(G地点)。万一同にも堤防が決壊して洪水が氾濫した場合はH地点「飯喰」と「臼井」に霞堤の開口部を造っておき氾濫の水を川に戻すという構想です。

信玄は、こうして完成させた治水施設を永久に守り維持するために、竜王河原宿をつくり、人々に堤防を始めとする管理を命じると共に、税を免除して人心を把握する措置を執りました。また、甲府盆地を横断して笛吹市一宮町の浅間神社など三つの神社から信玄堤のある三社神社まで神輿が練る「おみゆきさん」の水防祭りを盛大に挙げて、領民に治水の重要性を周知させました。

現在でもこの伝統は引き継がれ毎年、出水期の前の四月十五日に水防祭り「おみゆきさん」が行われています。

信玄堤MAP



三社神社

三社の御霊が集結。神幸の最終地。

三社神社



人々はどんな願いを託したのでしょうか。

四季の彩りの中で

■三社神社

三社神社は一の宮浅間神社（笛吹市一宮町）、二の宮美和神社（笛吹市御坂町）、三の宮玉諸神社（甲府市国玉町）各三社の祭神が勧請されています。創建年代は明らかではありませんが、川除祭の三社神幸の御旅所として成立したと考えられています。

かつては毎年四月第二亥の日に一の宮、二の宮、三の宮から神輿・神馬が渡御して水防を祈願する川除祭が盛大に行われました。明治初年には二の宮、三の宮の神幸は廃止され、大神幸と呼ばれる一の宮浅間神社のおみゆきさんが四月十五日に執り行われていました。平成十五年には、三社から渡御が復活、三社御幸として信玄堤を練り歩いています。

石鳥居は三社神社入口に建立され、明神鳥居の形式ですが、台輪があるので台輪鳥居とも呼ばれます。柱間は三・二・六m、高さ二・七〇mで礎石上に建ち、柱は柱間の幅に比べて太く力強い表現を示し柱頭には台輪が加わります。笠木や鳥木は反りのある曲線のみせて、柱の転びとともに安定感を与えています。貫の中央に「三社大明神」の額を掲げ、額の裏面に「承応元壬辰年極月吉祥日」の刻銘がありますが、承応元年（一六五二年）は修理の年代を示します。この石鳥居は形式手法からみて桃山時代の建立と推定されています。